

## 史談

2010 (H22) 12・15

## ■ 奥村幸雄先生、亡くなる。

さる11月5日に亡くなられた奥村先生の葬儀が、7日、ナウエルホール白鷹で行われました。先生の生前の御恩に感謝しつつ、ここに葬儀委員長の挨拶を再録します。

## ■ 告別の言葉

葬儀委員長 江口儀雄

秋晴れで冬の準備など、何かとご多用の中にもかかわらず、故奥村幸雄先生のご葬儀に参列たまり、心から感謝を申し上げる次第であります。

5日早朝、先生がお亡くなりになったと聞いて、今まで先生から受けた励まし、そして元気づけられ、指導していただいたことを思いおこすと、万感胸にせまり言葉も出ませんでした。私にとって、奥村先生は高校時代の恩師であり、教室では数学を習いました。社会クラブの顧問であった先生の後について、伝説の聞き取りや史跡巡りをする中で、民俗調査の方法や考え方を教えていただきました。

卒業後は、先生を中心に柳田国男を読む会を立ち上げ、地域の民俗調査をし、会誌『雪国の春』を発刊してきました。白鷹町の日影で即身仏の発掘が行なわれると、県内の即身仏を訪ねまわったり、昔のお山詣りはどうであったのかと、白装束に金剛杖をつけて、二日ばかりで湯殿山まで歩き通したりしました。

先生は地域の歴史民俗の調査をこつこつと続けて来られ、『白鷹町史』はじめ、『深山紙』『野の信仰』『鮎貝八幡神社獅子舞』『梵字探訪』『遅日庵杜哉考』など40冊ほどの著作を出版されました。一つ研究が始まると、そのことだけが頭の中がいっぱいになり、時間を惜しまず研究に没頭されました。昭和53年、深山和紙が山形県無形

文化財に指定されたのも、先生の仕事があったのでした。

高校の先生を退職されてからは荒砥地区公民館、白鷹町史談会、白鷹町文化財保護審議会、白鷹子どもの本研究会、置賜民俗学会などの代表を勤め、指導者として後進の者を導いてくださいました。平成16年には齋藤茂吉文化賞を受賞され、昨年は文化財保護や社会教育の活動が評価され地域文化功労者として文部科学大臣賞を受賞されました。

89才の先生の生涯は、すべてを先人の足跡の掘り起こしに捧げたものでありました。先生の仕事は白鷹町や置賜地方における、埋もれたものの掘り起こしという文化的な面で、大きな財産を残していただきました。その仕事を私たちが継承していかなければと考えています。

本日の葬儀にあたり、先生の遺徳とお姿を偲び、お別れの香をたむけていただくことをお願いし、告別の言葉といたします。

## ■ 五・一五事件の首謀者

三上 卓の書 4

樋口 利夫

森先生と兄に話を戻すと、おそらく当時の政情、維新史なども話されたものと思われる。なかでも農村の困窮問題は左右の立場を問わず国の存亡にかかわる大きな問題で、森先生もこのことは十分に御存知だった筈である。戦前も戦後も、農業問題が国の命運を左右することは歴史の証明するところである。労農対政治への不信や抵抗とか、歴史の浅い民主議会への不信、学究者と言論界への圧力のなど、目まぐるしい時代であった。

西郷の遺訓については、翁に最も近く、最も遺訓の整理に力を尽くしたのが実は庄内藩士であった。西南の役では庄内藩は佐幕方であったので佐賀藩(西郷隆盛軍)に抵抗して破れた。しかし、西郷は庄内藩へ将来にわたる温情をもった対応をしたことが、庄内の人心に深い尊崇の念をもたらしたとされる。なお、兄の生き方を決する大切

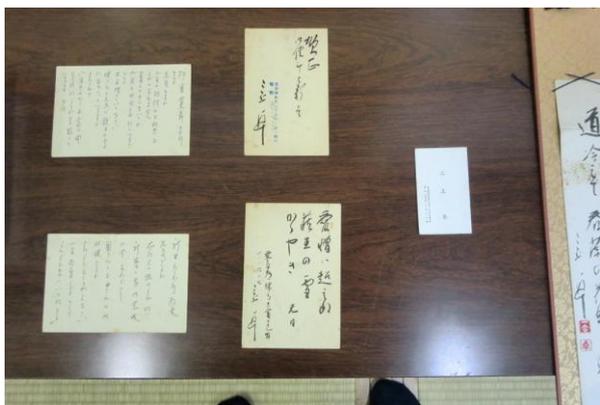
な環境であったと思うが故に、兄と村内の恩人や、志を同じにする方々の紹介をしておきたい。

○南洲翁の会（正式な会の名称は不明）4、5名の小さなグループだったという。

○部落有志による「長井村文化会」は村内の農業従事者、教員、短歌会などの会員達によるグループだった。戦後の農業事情（東亜連盟なる国内のみならず亜細亜各国からの会員として参加できた）、食糧増産にかかわって秀でた肥料の開発なども議論されたことは大きな反響を呼んだ。

○短歌の会には、戦後、陸軍被服廠を退いて帰郷された大道寺吉次氏（アララギ派歌人）を中心とする短歌会、思想上の論議も熱心な人がいて、既存の左翼にあきたらず、やがて無政府主義を支持する菊地某氏とか、プロレタリア文学に傾倒して『ふるさとの馬』をまとめられた大道寺浩次氏など、郷土の先輩として記憶に残る人達がかなりの数おられた。

そのような環境の中で兄の考え方は青年将校達を中心とする集団と右翼的組織、その中心的存在としての学者や軍人の思想・行動を肯定し、共鳴せずにおれないような考え方に傾いていったと思われる。



かくして、西欧や米国はデモクラシーのスタートを切ったのだが、わが国内では各層の反撃によって中断を余儀なくされ、やがては布告なき戦争に突き進むこととなった。最後は人間魚雷をはじめ、遂には片道切符の往路油のみを積んだ特別攻撃隊の体当たりが最後に選んだ作戦で、若き命をむざむざと失わせる結果になった。

こうしたありさまは幾多のルポや戦記文学にもなっており、本県出身のライター水口文乃著『知覧からの手紙』などにもくわしい。（続）

## ■ 歴史講演会、開かれる

さる11月6日、史談会の歴史講演会が中央公民館で開かれました。講師は高橋拓氏で「十王焼のルーツ」についてのお話をいただきました。

この焼き物はきわめて田舎くさい、それでいて捨てがたい味のある日用品の瀬戸物です。おそらくその辺の台所の裏手や、小屋の片隅に片付けられているかも知れません。もう一度身のまわりを見直してみたいものです。



今回の講演会については、せっかくの機会だが参加人数が少なくもったいなかったという話や、焼き物についての知識がない人には、少しむずかしかつたという声も聞かれました。いずれ何かの機会に十王焼を一堂に集め、展示してはどうかという意見もあり、今後の課題にしたいと思います。ご協力ありがとうございました。